



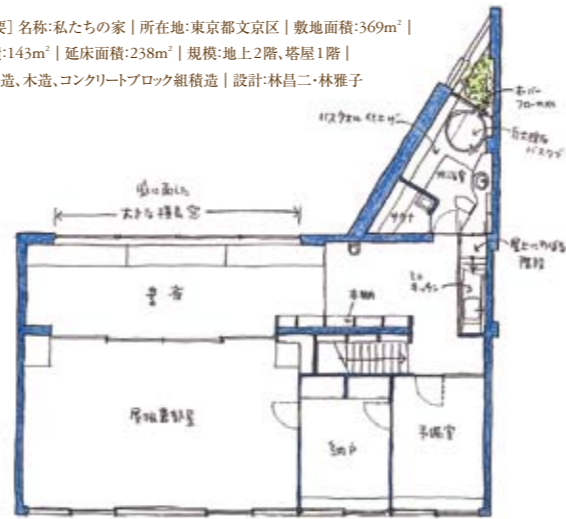
Syoji Hayashi・Masako Hayashi | Our House

中村好文—イラストも
Yoshifumi Nakamura

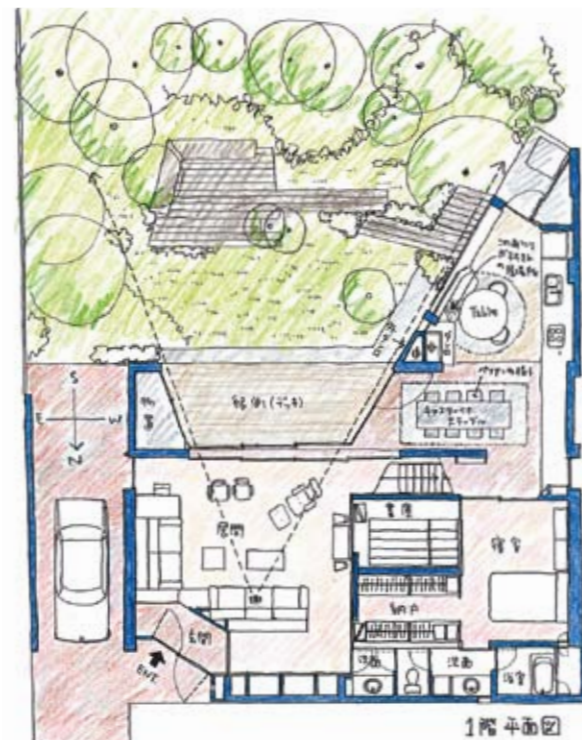


広い縁側(デッキ)に椅子を出し、うらかな陽射しを浴びながらお喋りしていると農家の縁先で日向ぼっこしているような幸福な気持ちになります。この日は快晴で4月のような暖かさでした

[建築概要] 名称: 私たちの家 | 所在地: 東京都文京区 | 敷地面積: 369m² | 建築面積: 143m² | 延床面積: 238m² | 規模: 地上2階、塔屋1階 | 構造: RC造、木造、コンクリートブロック組積造 | 設計: 林昌二・林雅子



2階平面図



1階平面図

先日、建築家・林昌二さんのご自宅を訪れてお話をうかがう機会がありました。林昌二さんは『新建築』(1981年2月号)にご自宅を発表したとき「私たちの家」というタイトルを付けられましたが、今回はその「私たちの家」を設計していたころの話をはじめ、林さんならではの建築観、住宅観など、示唆に富んだ刺激的なお話をうかがうことができました。そもそも林さんのご自宅で林さんからお話を聞かせていただき、ついに見学もさせていただこう...という欲張りな企画を立てたのは、ほかでもないINAXの方です。この『INAX REPORT』の読者ならご承知のことと思いますが、INAXは毎年、建築家がしのぎを削って競い合う「デザインコンテスト」を行っています。昨年はこのコンテストが30回という節目を迎えましたが、この30回を記念し「デザインコンテスト優秀作品集」に林昌二さんのお話を載せよう、についてはここ数年来コンテストの審査員を務めてきた私に「聞き役をするように...」というお達しの電話があったのです。本当は「林昌二先生と対談しませんか?」というお誘いでしたが、「対談」というのはお互いが色々な意味で対等であれば成立しないものです。電話の話を最後まで聞くまでもなく、私は「聞き役」を仰せつかったのだと解釈し、緊張しつつも喜んでこの大役をお引き受けしました。じつは、私が林昌二さんの設計された「私たちの家」にお邪魔するのは今度が3回目です。最初は、この住宅が『新建築』の1981年2月号に「私たちの家」として発表されてから半年もたたないころだったと思います。この住宅の発表に林さんは並々ならぬ力を注がれていました。ただ美しい写真を並べるだけではなく「暮らしから住まいへ」という平明

な言葉で書かれた見事な解説文があり、さらには手描きの図面と林さん自身が撮影された写真をふんだんに散りばめた懇切丁寧なディテールの紹介もあるという、20頁を越えるズッシリと読みごたえのある濃い内容だったので(まだこの号をご覧になったことのない方は、今すぐの小冊子を抛り出し、しかるべき図書館に駆けつけてバックナンバーの155頁を開いて見ることをお勧めします!)。当時私は、吉村順三先生の下で家具デザインの仕事をしていたが、吉村事務所の同年配の仲間たちとダメモトをお願いし、めでたくお許しを得て見学することができたのです。

実際に「私たちの家」を訪れ、つぶさに見学させてもらった私は、感嘆し、共感し、感化され、鼓舞されました。住宅に限らず広い意味でも設計心得のお手本ともいべき作品を目のあたりにし、なによりも自分がライフワークと想い描いていた仕事、単なる夢ではなく具体的な手応えとして身近に感じられたことが大きな収穫でした。おそらくこの雑誌を見て私のような見学希望者が殺到したにちがいない。林さんはそのことに辟易し「実際に見学しなくてもこの本を読んでもらえば、この家のことはぜんぶ分かりますよ」という気持ちで、『新建築』の発表と前後して『私の住居・論』^[1]という本

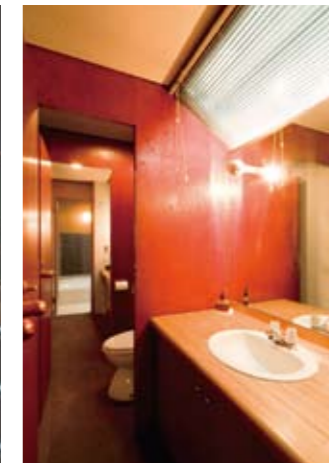
を出版されたのです。この本は『新建築』の続編ともいべき内容の本で、『新建築』の読者よりもう少し一般的な読者に向けて書かれたものでした。もちろん私はこの本が出版されると同時に買って読みましたが、たちまちこの本の面白さと、奥の深さに魅せられました。この本に書かれているすべてのことが、じわりじわりと私の胸の中に、静かに、確実に、そして深く浸み込んでいきました。この本の“面白さ”と“奥の深さ”は、じつは、そのまま住宅設計の“面白さ”と“奥の深さ”でした。さらに言えば、普通の人の普通の暮らしの“面白さ”と“奥の深さ”なのでした。私はこの本を自分の傍らに置くことによ



玄関に入って靴を脱ぎ、左側を見たときに視界に飛び込んでくるのが居間から縁側へ、そして庭へと繋がっていくこの見事な眺め



林昌二さんのとっておきの居場所。カウチと呼ぶこのご自慢の場所を決めることから、この住宅の設計がスタートしたそうです



ふたつの洗面所がトイレを挟んで並んでいます。手前は来客用、奥は家族用。3つの小部屋を通り抜けることで回遊できるプランが生まれます



2階の水浴室。手前の扉を開けるとサウナ室。床から履にかけてブルーのバスタオルが敷きつめられています

って住宅設計の道を歩き始めることになりました。

「私たちの家」を2回目に訪れたのは、たしか4年前の9月のことです。「私たちの家」で、林昌二さんのお誕生日のパーティがあり、そのお祝いの会の隅々このほうに参加させていただいたのです。そして今度が3回目。今回は林昌二さんの「聞き手」という大役を仰せつかったので、事前に手元にある林さんの著作をひととおり読み直すなど、予習にもたっぷり時間をかけ、面接試験でも受けに行くような緊張した気持ちでドアの前に立ちました。肝腎のインタビューの様子は「第30回INAXデザインコンテスト優秀作品集」をご覧ください。ここでは3度目の見学印象について書きたいと思います。

この住宅の魅力のひとつは、玄関を入り、段差のない床の仕切りの手前で靴を脱ぎ、居間に入って体を90度左側に向けたとたん目に飛び込んでくるドラマチックな光景です。広々とした居間の向こうに縁側があり、その先に庭がありますが、帰宅した林さん自身はもちろんのこと、訪問客がここに立って庭の方向を眺めたときの視覚的な効果が演出されているのです。このことは、平面図を見てもっとはっきり分かります。食堂・台所のウイングは南西にL型に伸びていくのですが、それが矩形ではなく、先すばまりの台形にしてあることで、縁側の東側にある物入れがわざわざ斜めにカットされていることで、視界が扇状に開くように設計されているのです。ためにその2本の角度をそのまま室内側に延長してみると、庭に面してソファに座った人のちょうど顔の位置(すなわち目の位置)で交点を結びました。このことは私がたまたま気付いたことですが、おそらくこうした工夫はこの家のそこそこに宝物のように隠されているはず。ただ、残念なこととその宝物は林昌二さんと同等の慧眼の持ち主でなければ発見できないたいぐいのもです。そこで林さんは「せつかくあちらこちらに素晴らしい宝物を隠したのに、誰もその宝物に気付いてくれないし、見つけてくれないのでは面白くないなあ…」と考えたにちがいがありません。先ほど書いた『新建築』誌と『私の住居・論』という本で、その宝物の在りかと、その巧妙な建築的な手口を披露して

みせてくれました。“巧妙”とか“手口”とか、うっかり犯罪のにおいをする言葉を使ってしまいましたが、たぶん私の中に、林昌二さんぐらい「確信犯という言葉の似合う人はいない」という思い込みがあるからかもしれません。だって、そうでしょう、著書にわざわざ「建築に失敗する方法」^[2]とか「林昌二毒本」^[3]なんて物騒なタイトルを付けるなんて、確信犯以外の何ものでもないじゃありませんか。

閑話休題。もう一度、宝物の話に戻しましょう。家の内部を見学してあらためて感心するのは、この家には居心地の良さそうな“お宝スポット”が沢山あることです。先ほど書いた庭を正面から眺める居間のソファもいいですし、深い軒に覆われた縁側もじつに気持ち良さそうです。そして、1階ではなんとと言っても丸いテーブルを囲む、洋風茶の間のような雰囲気のあるコーナーを忘れるわけにはいきません。ここには林さんがカウチと呼ぶベンチが造り付けられていて、その角のあたりに座ると、居間側からの視線が傍らにある暖炉の壁にちょうどいい按配に遮られるようになるので、自分の巣穴の中にスッポリおさまったような安堵感に包まれます。じつは、そこが極上の居場所になっているのは偶然ではなく、林さんがそうなるように設計したからです。林さんは「設計は、私の座を決めるところから始めました」と書いていますし、このコーナーのことを「台所兼食堂兼書斎兼暖炉付きラウンジ」と呼んでいます。さらには「昔の農家の炉端のあるじの座を思い浮かべたほうがぴったりしそうな場所」だと書きました。住み手である林昌二さんが、自分の一番好きな場所、一番落ち着く場所を作ってくれるよう、設計者である林昌二さんに依頼して生まれたスペースと言ってもいいでしょう。

2階に上がると、ここにもっとおきのスペースが待ちかまえています。なかでもお風呂好きだった林雅子さんの注文で作ったという「サウナ」と「水浴室」は見ものです。林さんは「世界最小のサウナだと思ふ」と話していましたが、その小ささがなんともいえない居心地の良さを醸し出しています。そして言うまでもなく、その小ささを成立させているのは、林さんの動物的と言ってもよいスケール感と、ディテールに対する卓越したセンスです。この住宅を設計したところの林さんは大規模なオフィスビルの設計に明け暮れていたと



広々とした居間の大開口部。正面の横長窓はカウチのある「洋風茶の間」。上部の三角屋根の屋根裏にサウナと水浴室が最小限寸法で収まっている

思いますが、その反動もあって小さな空間を設計することに特別な情熱を燃やしたのではないのでしょうか。サウナと水浴室の図面を載せた製図版に向かい、林さんが「さあ、やるぞ!」と嬉しそうに腕まくりする様子が目に浮かぶようです。そのようにしてできあがったこの極小の空間は、ディテールの宝庫になりました。すべてが理詰めのできているので見ようによってはちょっと濃密すぎると思えるほどです。しかし、水浴用のバスタブからオーバーフローした水で窓先にある小さな庭の植物に水遣りができるアイデアや、床の全面にブルーのバスタオルを敷きつめ、床にゴロゴロ転がれば身体が拭けるという愉快なアイデアなど、“清家清先生ゆずり”ともいうべきユーモアと茶目つけたっぷりの遊びもあって、それがほどよい息抜きの役割をしています。書き出すときりがないのでこの辺でやめておきます。もっとくわしく知りたい方は、『新建築』と『私の住居・論』をご覧ください。

4年ほど前、林昌二さんに『意中の建築』という本の書評を書いていただいたことがあります。内容は身に余る好意的なもので、お礼

の言葉もないほどありがたかったのですが、なかでも嬉しかったのは「対象を見る目が建築工学の目ではなく、普通に暮らす人の、暮らしを楽しむようにする目であるのが優れた点です」という言葉でした。今回、林さんの自邸の内部を見学しながらこの言葉を思い出し、この言葉がそのまま林昌二さんの自己紹介になっていることに気付いたのです。そして、その言葉からごく自然に『林昌二毒本』の中にあつた、住宅設計に取り組むすべての建築家に向けられた次のような珠玉の文章を思い出していました。「住宅を設計する人は暮らしのディテールに興味があれば、なんの面白みもないと思うんです。暮らしの隅々のことをきちんと温かく処理するところに住宅の面白さがある。1軒の住宅の中には世界が入っているんです」。この言葉、住宅設計をライフワークに選んだ者としてゆめゆめ忘れることのないようにしたいものです。

1—『私の住居・論』林昌二著[丸善/1981]
2—『建築に失敗する方法』林昌二著[彰国社/1980]
3—『建築家 林昌二 毒本』林昌二著[新建築社/2004]

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。

主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。

主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house!』[ラトルズ/2009]など。



赤く染めた桧合板がひととき鮮やかな2階の屋根裏部屋。屋根裏部屋という言葉が不似合いに思えるほどの大空間



屋根裏部屋から一段上がった廊下状のスペースは、長大な机のある書斎。庭に面した大きな横長窓は、じつに気持ちがいい